

を作る妻の方から夫に、たまには外でフォーを食べてきて、と言いたくなるかもしれない。

引用文献

トリップアドバイザー. 2015. 「世界で一番おコメを食べているのはどこの国？」〈<https://>

www.tripadvisor.jp/news/graphic/etrice/〉(2019年6月18日)

Vn Express. 2013. 11 lý do vui đàn ông chán ‘com’ thêm ‘phở’. 〈<https://vnexpress.net/doi-song/11-ly-do-vui-dan-ong-chan-com-them-pho-2896837.html>〉(2019年5月21日)

現代インドにおけるダリト女性と教育環境

本 山 可南子 *

「わぁ、新しい服買ったの？クルタも良いけど、そういう洋服も似合うね！」

「シーッ！こういう服はお兄さん・お姉さんに咎められるから、今はまだ秘密にしてて！」

「え？でも、近所の友だちは普通に着てるよね。あなたが着ると家族に怒られるってこと？」

「そう。なんというか…ビハールの問題なの」

これは、筆者がインドのビハール州でフィールドワークをしていた時の、現地の女の子とのやり取りです。約3ヵ月、ホームステイをしていた家の人々は、カースト制度において最下層に位置づけられているダリト(かつての不可触民)といわれる人々です。彼女もホームステイ先の家族の一員で、当時20歳にして毎日家事と勉強で忙しそうにしていました。そんな彼女がカラフルなクルタと

スパッツを合わせるスタイルから、ジーンズと落ち着いた紺色のノースリーブに着替えており、ガラッと印象が変わって素敵だねと伝えたところ先ほどのように返されたのです。

周りの人から咎められないよう、秘密にしておかなければならない新しい洋服、そこには一体どのような“ビハールの問題”が隠されているのでしょうか。

よくよく彼女の話聞いてみると、結婚適齢期にある身でノースリーブを着てジーンズを履くと男性の目を引く行為と取られるので、特別な理由がないとこういった洋服を着るのは控えないといけない、ということでした。インドの伝統的な服装であるサリーや、普段着に着易いクルタといった格好をすることが外聞も良く、自分の身の安全を守るうえでも都合が良い、ということのようです。

インドの服ではなく洋服を着ることに対し

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

て、家族全員に咎められるのかというところという訳ではないそうです。意外なことに、父親代わりの伯父は特に否定的なことは言わず、彼女と同世代の従兄たちの方がそういった服装に苦い顔をして注意をする、とのことでした。

ホームステイ先で歳が近く同性ということもあり彼女と一緒に過ごす時間もたくさんあったのですが、何度かこの「ビハールの問題」にぶつかることがありました。

さらに別の日、キッチンで彼女と夕飯の準備をしていると彼女の携帯電話に着信が入りました。いつもどおりすぐに電話を取るかと思いきや、近くに誰かほかの家族のメンバーがいらないか念入りに確認してから掛けなおしていたので、

「どうしてさっき、電話を取る時にあんなに注意深く周りを見渡していたの？」

と聞いてみると、

「相手は親戚の男の子で、彼と結婚したいと思ってるけど、お父さん（彼女の伯父）は彼をあまり良く思っていないから秘密なの。それに、大学を卒業する前に誰かと結婚させられるかもしれないから不安なんだ」

と返ってきました。

思いがけず、彼女の人生が大きく変わるような事情を聞いてしまい驚きましたが、インドの、特に農村部においては女性が 20 歳前後でお見合い結婚をするのはごく普通のことだと教えられ、彼女らの希望が叶わずに話が進む可能性も大きくある、ということを改めて実感しました。

さらに彼女は、

「もし彼と結婚出来たとしても、相手の両親は私が大学へ行くことを良く思っていないから、今以上に家事の手伝いをたくさんさせられることになって勉強が出来なくなりそう。でもあと 2 年は自由が欲しいな」

と続けました。

彼女の話の聞くと、人生の局面において自分で選択できる状況を作るためには、勉強することが大切だ、と考えていることがうかがえました。彼女は小学校入学前、実家がある田舎の農村地域からひとりで伯父の家に預けられ、それ以降の約 10 年間この家で過ごしているという背景があり、人生の転機において教育が肝になっていることを、身をもって経験しているともいえます。

こうした事例から明らかなように、インドにおいて教育は人生の選択肢を増やす手段となっていることがわかります。私は、ダリトといわれるカースト制度の最下層に位置づけられてきた人々が、どのような教育環境にあり、どのように教育の経験を積んでいるのか、そしてそれが個人の人生にどう作用しているのか、という点について研究を行なっています。

ここでインドの学校制度について、簡単に説明します。私が調査を行なっているビハール州においては、義務教育として小学校（5 年間）・中学校（3 年間）に通いますが、これらの学校の運営主体はさまざまです。日本のように公立学校や学費の高額な私立学校だけでなく、NGO 団体や宗教団体が運営主体となり安価もしくは無償で学校が運営されています。

日本と大きく異なるのは、政府が運営する公立学校が機能していないことが挙げられます。特に農村地域や山間部などでは、配置されている学校の数が少ないことや、先生に課された授業外の事務的な業務が多いことなどが背景にあり、授業時間になっても先生が教室に現れなかったり、出欠のみ取られて授業が放棄される、あるいは教科書を読み上げるのみであったりと、公立学校の質が低いことが問題となっています。

もちろん、すべての公立学校がこのような機能不全に陥っているわけではありませんが、無償で義務教育を受けられる公的な教育機関だからといって、安定した教育が受けられるとは限りません。

こうした状況に大きく左右されるのは、貧しい家庭に生まれた子どもです。無償で学校教育を受けられたり、学校によってはお昼の給食を食べられたり、ということが就学・通学・進学の特権となっている彼らにとって、公立学校でそれが叶わなければ、家の手伝いや働き手に出されることになることも多々あります。

さらに、経済的に厳しい家庭であること以外にも教育を受けることが困難な状況にある人々がいます。それは、女性であるということ、またカーストにおける身分が低いということです。

これまでのインドの歴史において、無償で義務教育を受けることは全ての人にとって容易ではありませんでした。イギリスの植民地下ではエリート官僚育成という目的のもと、公的な教育を受けられるのは一部の上位カースト

の男性だけでした。しかし、1947年の印パ分離独立から現在まで徐々に、個人の属性、特にカーストや性別によって教育が受けられない状況が是正されてきました。それでも、今なおカーストが低く、女子に生まれることによって、教育を受けることが叶わない、あるいは望まれていない状況は依然としてあります。

冒頭で紹介した彼女は、家事に追われ、進級試験につまずきながらも、時間が許す限り、学校教育における知識や経験、あるいは自由な時間を享受したいと考えています。親族からの結婚のプレッシャーも含め、社会的な状況が厳しい中、教育を受ける権利を保持すべく立ち回ってきました。

しかし、注目すべきは、こうした子どもに対して、NGO 団体・宗教団体の運営する学校が教育支援を活発に行なっていることが挙げられます。このような学校は公立学校や私立学校と同等もしくはそれ以上の質を保ちながら教育支援を行なっているため、通学先の学校として積極的に選択されている、という実態があります。

私の調査地であるビハール州のブッダガヤは、ブッダが悟りを開いた地であることから、仏教徒の聖地として有名です。さまざまな宗教団体が活動をしたり、インド国内外から観光客が集まったりしています。さらに、ビハール州はインド国内において最も貧しい州であることから、教育分野に限らず何らかの形で支援を行なう NGO 団体が多く参入しています。

こうした理由から、NGO 団体や宗教団体



写真1 NGOによる教育支援の一例
規模は小さいが平日は30名程が集まる



写真2 学費が高額で大規模な私立学校
保護者（中2人は生徒）と担任の面談

が運営主体となっている学校は、公立学校や高額な私立学校よりも多く見受けられました。

私のホームステイ先の付近にも、NGO 学校に通学する子どもがたくさんおり、その中でも密に支援を行なう学校に通学していた女の子の例を紹介したいと思います。

彼女は家から徒歩で30分ほどの場所にあるNGO 学校に通学しており、朝7時30分から昼の13時まで5教科と副教科の授業のほか、朝30分間のお祈りと軽食の時間を過ごします。

学校には幼稚園から中学校までの生徒がおよそ300名集まり、それぞれの学費や教科書、制服、その他学校に関わる教育費も全て学校に対する支援で賄われています。校舎もコンクリートの2階建てで、学年・クラスごとに教室があり、PC教室やお手洗い、水回りも、写真2の私立学校と同様、清潔に整備されています。

このような手厚い教育支援を受けるためにどうすれば入学できるのか、校長へインタビューを行ないました。

すると、この学校に入学する子どもは、ある基準に沿って選ばれていることが明らかになりました。

第一に、経済的に貧しいこと、第二に、カーストが低いこと、そして最後に父親や母親といった保護者の有無や彼らの状況を加味して、どの家庭の子どもが優先して学校に入学すべきか、検討するとのことでした。

毎年、定員を大幅に超えて入学希望者が来るため、一軒ずつ訪問しながら家庭状況の調査や保護者への面接を、時間をかけて行なうそうです。

確かに、近所に住むその彼女には父親がおらず、金銭的にも余裕がない家庭に生まれ育っていた状況がありました。

同時に、付近の公立学校のうち彼女の家から最も近い学校は近年開校されていなかったことを考えると、彼女が家の手伝いや働きに出ずに、通学して勉強をできる環境にあるのは、少なからずこうした私的な団体による教育支援の存在があるからだと思います。

以上のように、公的教育の恩恵を受けがた

い人々のもとに私的な教育支援が行き渡っている状況を目の当たりにし、人々に選択の自由がある状況の重要性を改めて認識しました。

すなわち、それぞれの集団帰属がどのようなものであっても、経済的状況に余裕がなくとも、無償で義務教育を受けたいと思った時に、全員に学校の門戸が開かれている状況を生み出す必要があります。

こうしたことから、これまで虐げられてきた歴史をもつダリトの人々に着目し、いかに彼らの生活と教育の機会が程遠かったのかをひもとき、どのような教育の経験によって彼らの置かれた状況が改善されていくのか、という過程をこれからの研究で詳細に明らかにしていきたいと思います。

ウガンダで IT がつくるバイクタクシーの安心

大 谷 琢 磨 *

ウガンダで感じた夜間移動の不安と不便さ

2015 年 9 月の夜 10 時すぎ、わたしは、ウガンダの首都カンパラにある中華レストランで、先輩の研究者たちと食事を終え、帰路につこうとしていた。レストランを一步出ると辺りは暗く、車の通行がない。見当てるのは、50 m ほど離れた交差点で客待ちをしている 3 台ほどのバイクタクシーだけだった。当時、わたしはカンパラに知り合いがおらず、彼らを移動手段として使う以外に方法はなかった。しかし、相手は得体の知れない運転手であり、バイクタクシー運転手による強盗や連れ去りのうわさを聞いたこともあり、安心はできなかった。運転手を不快にさせないよう、運賃交渉はせず、言いなりのまま、

わたしはバイクにまたがった。バイクタクシーに乗っているあいだ、運転手の名前や住所などといった情報を聞き出し、何かあった場合には、その情報を警察に届け出ようという心づもりだった。無事に滞在先に帰着したあとも、先輩たちとショートメールでお互いに無事を確認しあった。2015 年当時、見ず知らずのバイクタクシー運転手に身をゆだねるのは、かなりの緊張感をともなった。

人々に親しまれた交通手段—ボダボダ

バイクタクシーとは、自動二輪車を利用した交通機関である（写真 1）。ウガンダではバスや鉄道といった公共交通機関が未整備で、人々が気軽に利用できるのは、乗り合い

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科